

特集 農学系学部・大学院の未来を考える

「特集」担当者からひとこと

會田 勝美

日本農学アカデミー副会長

日本農学アカデミー会報 20 号では特集として「農学系学部・大学院の未来を考える」を取り上げることにしました。会報 18 号では「学際的教育研究組織の現状と課題」を特集しました。また会報 19 号では「農学関連研究開発独法における総合研究の現状と課題」を特集しました。

ところで大学教育の再生が叫ばれて大分時間が経過しました。また大学教育も含めて世はグローバル化すべきとの論調が強いようです。それに合わせるかのように、文部科学省は大学のミッションの再定義を進めており、昨年度には教育系学部や工学系学部は終了したようで、今年度は残りの学部についてミッションの再定義を求めるようです。聞くところによると今年 6 月に開催された全国農学系学部長会議の第一常置委員会においても「農学系学部のミッションの再定義」を検討課題として取り上げたとのこと。そこで会報 20 号では、特集として「農学系学部・大学院の未来を考える」を取り上げ、各農学系学部・大学院の未来について各大学の関係者の方々に原稿を書いていただくことにいたしました。

全国農学系学部長会議というと私にとっても懐かしい会議です。国立大学法人化の 1 年前から法人化後の 3 年間、東大農学部長を勤めることになり、3 月には前学部長より次の会長は君に決まったといわれ、6 月の総会でどのような内容の挨拶をすべきか迷いました。幸い過去の同会議におけるすべての講演や発言がテープ起こしをされ冊子体になっておりましたので全て読み返したところ、東京農業大学前理事長の松田藤四郎先生が招待講演をされており、その中で「私立大学には建学の精神がある」、東京農大のそれは初代学長の横井時敬先生が述べられた「人物を畑に還す」であり、教育の理念は「実学主義」であるという趣旨の発言をされていました。ちょうど国立大学法人化が 1 年後に迫っていましたので、「これだ」と思いました。私の前任者の時に、国立大学農学部長会議を改組して、私立大学や公立大学も含め全国農学系学部長会議としたとのこと

です。他分野ではいまだに国立大学だけの会合を持っているようですが、農学は、国立も公立も私立も一丸となって事にあたる気運が醸成されていたようです。

どうも全国の国立大学農学部は、ミニ東大農学部を目指しているように私には見えたので、これでは法人化後に生き残れないと感じ、早く私学の建学の精神や教育の理念に相当するような「大きな目立つ旗を立てよ」と挨拶で述べました。私には、地方の国立大学農学部は地域貢献が重要なミッションになるのではないかと当時は思われました。

今回の特集の背景には、法人化から10年が経過して、各大学の農学部がどのような未来を考えられているのかという私の興味があります。また私立大学は、将来の少子化に対してどのような未来を考えておられるかも知りたいところです。文部科学省あたりでは、大学を研究主体の大学と教育主体の大学に分けて支援することを考えているようです。国立大学だけでも、旧帝国大学系や地方国立大学がありますし、公立大学や私立大学もあります。また農学系の学生の多くは私立大学に在籍しています。研究主体の大学と教育主体の大学という2分法ではたして農学系学部は良いのでしょうか？ぜひお考えを聞かせてもらえればと思います。

科学の発展とともに科学研究は細分化されてきました。科学の進歩にとってこれはいわば必然であったでしょう。しかし、あまりに細分化されすぎたため、全体を見渡せない研究者や、社会の未解決な課題が何であるか気がついていない研究者が増えたことも事実でしょう。その反省から、分野横断型や分野融合型で課題を解決するための研究が思考され始めています。科研費の分科・細目もあまりに細分化されたことから、課題解決型の新たなカテゴリーも考えられているようです。その契機になったのが、農学における食料生産であったのは事実であり、これば農学が誇って良いことかもしれません。農学や農業に向かって追い風が吹いているかにも見えます。しかし、農学の実力が試されているのかしれません。是非、成果を出してほしいものです。もちろん細分化された科学はこれからも重要であることには変わりはありませんが。